

公州麻谷寺五層石塔の四仏について

A Study of Four Buddha Statues on the Five-story Stone Stūpa in Magok-sa

水 野 さ や
MIZUNO Saya

1. はじめに

韓国忠清南道公州市に位置する麻谷寺は、『泰華山麻谷寺事蹟立案』（任源模書、咸豊元年）によれば、新羅善徳女王九年・百濟武王四十一年（640）慈蔵による開創、高麗時代の明宗二年（1172）、知訥による重建とされる。太宗七年（1407）および世宗六年（1424）の仏教抑制政策により、各地の寺院統制が計られた際に、麻谷寺は存続が許可された寺号の中には見出せない。史料の上での空白期間の後、大雄宝殿と靈山殿が共に覚淳大師により孝宗二年（1651）建立、さらに、『麻谷寺回祿後改建及重修記録』中の「乾隆四十七年壬寅九月初六日大法堂及一千五十余間回祿而越四年乙巳至戊辰大法堂改建」により、乾隆四十七年（1782）に大法堂（大雄宝殿）が改建され、純祖十三年（1813）に大光宝殿が建立されるなど、十七世紀以降、麻谷寺の伽藍の再整備が行われている。朝鮮時代後期には韓国を代表する名刹のうちに名を連ね、日本統治時代の1911年7月8日付の「寺刹令施行規則」（総令第八十四号）において、麻谷寺は、住持の交替・就任、寺刹財産について朝鮮総督に報告の義務を負う名刹三十一山の一つに指定されている。

現在、大雄宝殿前に建つ五層石塔（高840m）については、百濟の都熊津（現在の公州）という立地もあり、その「細長高峻」のプロポーションは百濟石塔の系譜を受け継ぐものであり、高麗後期における旧百濟地域の石塔の一例として言及されることがある。また、それ以上に、本石塔の青銅製相輪部は、韓国の石塔にあっては特異な例であり、中国におけ

るいわゆるラマ（喇嘛）塔の一部分を成している。高麗後期の元との関係において受容されたチベット仏教（喇嘛教）受容の文脈において取り上げられることが多い¹。また、建築意匠などの細部の比較考察を通して、中国元代の遺例との共通点が指摘され、関係性が強化されている²。

もちろん、著者は本稿において先行研究の指摘に異を唱えるものではない。しかし、高麗時代のいわゆる百濟式の石塔は、例えば庇仁五層石塔（忠清南道舒川郡、高麗・10～11世紀前半、図2）のように、百濟の木塔の要素を取り入れた石塔である定林寺址五層石塔（全羅北道扶余郡、百濟・7世紀前半）の復興の意識を顕著にうかがうことができるが、それに対して麻谷寺五層石塔は、その印象の違いをぬぐいきれない。基壇部と塔身部の幅の差が抑えられていることよりも、第一層塔身より第五層塔身にかけてほぼまっすぐに立ち上がるそのシルエットは、石塔というよりはむしろ、経幢に近い印象さえ受ける。

また、「元との影響関係」という点においても、元代仏塔・僧塔のもととなっている遼代・金代の仏塔・僧塔は、管見の及ぶ限りにおいては麻谷寺五層石塔研究において視野に入っていないようである。元代の仏塔および僧塔は、例えば戒台寺や潭柘寺の塔林（北京市門頭溝区）、銀山塔林（北京市昌平区）において見られるように、いわゆるラマ塔形式の仏塔・僧塔以外に、遼代・金代における仏塔・僧塔の形式を継承した例もかなり多い。

そこで、本稿は、本石塔第二層塔身の四仏について確認することにより、統一新羅以来の石塔の四仏の継承とともに、異例な要素があることを述べ、そ

こに遼・金の仏塔・僧塔に通じる要素を垣間見ることにより、麻谷寺五層石塔再考の契機とすることが主な目的である。

2. 麻谷寺五層石塔の四仏

麻谷寺五層石塔（図1-1）は、方形地台石の上に二段の框を設け、基壇下部・基壇上部を載せ、二段の受座の上に塔身部を戴く。五層の塔身部の屋蓋石は軒下二段式とし、輦角の反り上がりやや強く、そのため細身の塔身を一層丈高に見せている。特徴的なのは相輪部（図1-2）であり、いわゆるラマ塔形式の小塔を戴く。この青銅製小塔は、先行研究において、洪武七年（1374）の昌慶宮石塔や、高麗後期の舍利容器との比較が行われているが、この肩の張りがあるプロポーションは、金代（13世紀前半）の作例（図3）とも十分に共通する。

基壇部の地台石には眼象形の装飾（図1-3）を浮彫する。眼象とは空かされた空間を表すものであり、この内側が虚空であることを意図する。仏像の台座、浮屠などの基壇部地台石においても用いられる。空に浮かせることにより、地に接しておらず、穢れていないことを象徴する。しがたって、本石塔も、空にある、すなわち、高いところに立地することを暗黙裏に表現したものと言える。本石塔に見られる細かく反転しながら途中で刳りを表す形式は、例えば、崇興寺塔（遼寧省北鎮市、遼・11世紀後半、図4-1・2）基壇部地台石のように、本来は雲文の巻き込みであった要素を平板化させ、懿行大師塔（北京市昌平区、金・12世紀後半頃、図5-1・2）基壇部の眼象をさらに簡略化した表現に通じる。

第一層塔身には、南面のみに門扉を表す。第二層塔身の四面に一軀、合わせて四軀の如来坐像を比較的浅い浮彫りによって表す。なお、第二層塔身に四仏が表される例は、統一新羅の石塔においては無い。天敬寺址十層石塔（京畿道開豊郡出土、高麗・1348年、国立中央博物館蔵）などにおいては、各層に仏・菩薩および供養天を表しているが、韓国においては特異な石塔である。対して、遼・金・元の経幢、僧塔

においては、塔身の上方に仏・菩薩ないしは供養菩薩、奏樂天、比丘などの諸像を表す作例がある（例えば、金代の普蘭店西山一塔など〔図6〕）。このような点も、麻谷寺五層石塔の性格、機能を考察するための特徴として留意しておきたい。

四仏はいずれも蓮華座上に坐し、円形頭光・身光を付ける。通肩式に大衣をまとい、內衣の上端を胸前に表す。この着衣方は、高麗時代11世紀以降によく見られるものであり、中国の宋、遼、金の作例にも共通する。

また、円形頭光の左右に、東面は宝相華文、西面は雲文、南面は四弁花を中心に蔓状の茎・葉が周囲に展開する花文、北面は団花を中心に蔓状の茎・萼が周囲に展開する花文を配する。このような雲文を如来像の周囲に表す点、宝相華や牡丹などの花文を仏塔・僧塔に表す点も、銀山塔林の懿行大師塔など、遼代および金代の仏塔・僧塔に多く認められる点である³。

東面の如来坐像（図1-4）は、大衣の端に覆われ、坐勢は不明である。左手は屈臂して腹前に置いて掌を上に向け、左手第一指で押さえるように、円形の持物を執る。上三分の一の高さに線があり、蓋付きの容器（盒）と見られる。右手は屈臂して胸前に置き、掌を立てて第一・三指を捻じて他指を伸ばす安慰印を結ぶ。

南面の如来坐像（図1-5）は、右足を上に結跏趺坐する。両手は屈臂して胸前に置いて拱手とし、衣端で手先を覆う。

西面の如来坐像（図1-6）は、右足を上に結跏趺坐する。左手は腹前に置き、掌を上にして第一・四指を捻じて他指を伸ばす。右手は屈臂して胸前に置き、掌を立てて第一・三・四指を捻じて他指を伸ばす安慰印を結ぶ。

北面の如来坐像（図1-7）は、大衣の端に覆われ、坐勢は不明である。両手共に屈臂して腹前に置いて拱手とし、衣端で手先を覆う。

以上のように、麻谷寺の四仏において、東面の如来坐像はその配置と持物から薬師如来像であろう。薬盒を執る薬師如来像は、韓国においては8世紀後

半の陳田寺址三層石塔第一層塔身東面の如来坐像などに見出せる。

また、南・北面の如来坐像は両手先を衣端で隠す印相を結ぶ。これは、供養仏、供養菩薩に認められるが、韓国の石塔の四仏においては、おそらく高麗時代後期とみられる国立慶州博物館所蔵石塔塔身部材のうちの一材など、わずかな例のみである。腹前に置く左手で指を捻じる西面如来坐像の印相も、後述のように韓国の四仏においては珍しく、むしろ、例えばここでは、金・泰和二年(1202)の雲居寺広公禪師塔(北京市房山区、図7-1・2)を例に挙げるが、遼・金の仏塔、僧塔、経幢における如来坐像には多く認められる特徴である。

また、供養の性格を表す尊像を塔身に表す例としては、菩薩形像ではあるが、遼陽塔湾塔(遼寧省遼陽県、図8-1・2)などが想起される。表面に修理がおよび当初の様相を損ねているが、本塔においては、如来像二軀と供養菩薩像四軀とが混在している。菩薩像は、胸前合掌、胸前で華盤、水瓶を執る。なお、如来坐像は、うち一尊が弥陀定印を結び、もう一尊は左手を腹前に置いて第一指と他指を捻じ、右手は胸前に置いて施無畏印を結ぶ。

3. 統一新羅・高麗の仏塔における四仏の展開

それでは、韓国の仏塔における四仏について、現存作例をもとにあらためて確認することにより、麻谷寺石塔の四仏の位置付けを考えてみたい。

韓国には方形石塔の塔身部材に四仏を表す作例が幾つかある。慶州狼山にある陵旨塔において、塑像を四面に配置した例(統一新羅・7世紀後半)が報告されており、如来坐像は完形を保っているものではなく、いずれも断片となっているが、その中に「西方仏」という刻銘を伴う断片が発見されている。しかし、これがただちに密教的な四方仏を意味するものではなく、中国北魏時代の石窟における中心塔の四面に表された仏坐像(河南省鞏県石窟第1窟、甘肅省敦煌莫高窟第435窟など)のような状態であっ

たという復元案が提示されている⁴。

現存する石塔の作例としては、統一新羅(8世紀後半)の江原道襄陽陳田寺址三層石塔第一層塔身の四仏が早く、以降、朝鮮時代まで作例が認められる。本稿においては、麻谷寺との関係から13世紀までの石塔を取り上げ、四仏の図像を確認し、四尊の図像や配置に見られる規則性などを求めている。

なお、それに先立ち、慶州堀仏寺址四面石仏(統一新羅・8世紀前半)、慶州菩提寺石仏(統一新羅・8世紀中頃、図9-1・2)について触れておきたい。堀仏寺址四面石仏の西面は、観音・勢至の二脇侍菩薩を伴う阿弥陀如来立像三尊であり、菩提寺石仏は、軍威石仏(大邱広域市、統一新羅・7世紀後半)の中尊像のように触地印を結んでおり、阿弥陀如来像である。阿弥陀如来に対する面に宝珠形持物を執る如来像が配置されることから、東方の薬師如来像であることがわかる。韓国における薬師如来像の持物は、このように宝珠形から始まり、盒や鉢などに展開していく。

陳田寺址三層石塔(江原道襄陽郡、統一新羅・8世紀後半、図10-1~5)

本石塔は、陳田寺と関わりが深い道義のものであるという伝承を持つ浮屠(9世紀前半)一基とともに、陳田寺址に残る地上遺構である。道義の時代を遡り、本石塔は8世紀後半の建立であり、基壇上部には八部衆像を表し、第一層塔身各面に如来坐像を配置して四仏を構成する。石塔の塔身部材に方角の移動が認められないことから、四体の仏坐像の配置は当初の方角である。四仏はいずれも二重円光を付け、蓮華座上に結跏趺坐する。

東面如来坐像は、左手は腹部やや上方に置いて第二指を軽く伸ばし、他指を軽く曲げ、掌上に盒を執る。右手は右大腿部と腹部の間に置いて指を捻じるが、摩滅のため印相は不明である。南面如来坐像は、左手は胸前に置いて掌を外に向けて第一・二・三を捻じ、他指を軽く伸ばす。右手は掌を内側にして右膝に置いて触地印を結ぶ。西面如来坐像は、両手とも胸前に置き、左手は掌を内に向けて全指を軽く曲

げ、右手は掌を外に向けて第一・二指を捻じて転法輪印を結ぶ。北面如来坐像は、左手は腹前に置いて掌を上に向けるが、摩滅のため印相は不明である。右手は胸前に置くが、前膊半ばより剥落しており印相は不明である。

このように、陳田寺石塔においては四仏を図像的に区別する意識が明確である。しかし、尊名を明らかにすることができる特徴は十分とはいえない。その中で、西面の転法輪印を結ぶ如来坐像に関しては、慶州雁鴨池出土鑄造阿弥陀三尊像（国立慶州博物館蔵、統一新羅・8世紀前半）の中尊像も通肩式に大衣をまとい転法輪印を結ぶことから、阿弥陀如来である可能性が高い。そして、対峙する東面は左手に盒を執る薬師如来となる。

慶州東川洞出土石塔塔身部材（慶尚北道慶州市、統一新羅・9世紀後半）

現在、東川洞の寺址に屋蓋石断片とともに置かれている。四軀の如来坐像は、対となる二面どおし二重円光を付ける如来像二軀、周囲に火炎を伴う光背を付ける如来像二軀と、二尊対の意識がうかがえる。

その特徴から東面と推測される如来像は、左手を腹前に置いて掌上に盒を執り、右手は胸前に置いて施無畏印を結ぶ。その対になる面の如来像は、両手とも胸前に置いて転法輪印を結ぶと見られる。他の二面は、施無畏印を結ぶ如来坐像および触地印を結ぶ如来坐像となる。

本塔身部材においても、陳田寺石塔と同様に、西面に転法輪印の阿弥陀如来、東面に盒を執る薬師如来が配置される。しかし、南・北面については、施無畏印、触地印ともに当時の仏の通印として広く用いられていた印相であり、尊名の決定は困難である。なお、この両像は通肩と偏袒右肩という着衣方法の変化、左手はともに腹前に置きながら右手を一方は胸前、他方は膝前と上・下に違って表現していることから、図像の一定の範囲内で変化を付けようとする意識がうかがえる。

青巖寺修道庵東三層石塔（慶尚北道金陵郡、統一新

羅・9世紀後半）

石造宝冠如来形毘盧遮那仏坐像（大寂光殿安置、統一新羅・9世紀前半）をはじめ、統一新羅後期から高麗前期を代表する優れた石仏が安置される青巖寺修道庵には、憲安王三年（859）に道誂（827-898）が建立したと伝える三層石塔二基がある。道誂との関わりはともかく、その建築様式から、両塔とも建立年代は9世紀後半とみられる。そのうち、薬光殿前に安置される東三層石塔は、第一層塔身の各面に両隅柱を残して龕状に彫りくぼめ、如来坐像を浮彫りする。なお、本石塔は立地条件により堂塔全体が約45度方角がずれているが、堂の正面を南面とみて四仏を確認する。いずれも光背は伴わず蓮華座上に坐る。なお、表面の磨滅および彫刻の曖昧さにより坐勢が明確ではない像もある。

東面如来坐像（東北）は、左手は腹前に置いて第一指を伸ばし、他指を軽く曲げて掌上に円形持物を載せる。この持物は線刻による蓋の表現、上面を平にすることによる鉢形の表現は行われず、円形の宝珠形である。右手は右膝に置いて触地印を結ぶ。南面如来坐像（東南）は胸前で智拳印を結ぶ。西面如来坐像（西南）は触地印を結ぶ。北面如来坐像（西北）も、胸前で智拳印を結ぶ如来像である。

本石塔においては、東面の円形持物（宝珠形）を執る像、西面の触地印像の他の二軀は、足の組み方に左・右の変化を付けているものの、いずれも智拳印を結ぶ如来像である。

西面如来坐像は触地印を結ぶ像である。触地印は釈迦の降魔成道における手印を源流とするものであるが、中国および韓国においては釈迦に限らず仏の通印として広く用いられており、先述の軍威石仏中尊像のように、特に7から8世紀の韓国においては阿弥陀の手印の一つとして盛んに用いられた。本像が円形持物（宝珠）を執る東面如来坐像と対峙する面に配置されており、陳田寺石塔における配置関係から見ても、修道庵東塔においては触地印像が阿弥陀である可能性がある。

なお、左手に円形持物を執る像は、右手を触地印とする点で西面像と共通し、これまでに確認してき

た陳田寺石塔および東部洞出土の塔身部材とは異なる印相を示している。

一方、修道庵東塔の南・北面の如来坐像はともに智拳印を結ぶ。智拳印像は、慶尚南道三清石南巖寺所蔵の石造毘盧遮那仏坐像（766年頃）を最初期の作例とし、8世紀後半以降多くの作例が造られ、新羅華嚴宗の本尊像の図像として広く普及している⁵。

このように、青巖寺東塔に見出される触地印像（東・西面）、智拳印像（南・北面）は、ともに当時広く流布していた如来坐像の図像である。このような単独の如来坐像において流行していた図像を、石塔の四仏においても取り込んだものと考えられる。そのため、陳田寺石塔のように右手は施無畏印としていた円形持物を執る図像が、ここにおいては同様に円形持物を執りながらも触地印へと移行したものと思われる。これは、円形持物を執る如来像の内因的な図像の変化というよりはむしろ、右手を触地印とする如来像の図像が通印になったことに要因があるのではないかと推測する。

清州塔洞石塔（忠清北道清州市、後三国・9世紀後半～10世紀初）

現在、清州市内にある個人の敷地内に本石塔は移建されている。当初は現在地より西に40m程の位置であったとされる。複数の石塔部材を集めており、上層基壇の面石・第一塔身部材および受座・第一から三と第五層の屋蓋石は当初材で9世紀後半頃、第三層屋蓋石上の部材は朝鮮時代、四仏を配する塔身部第一層の部材は9世紀後半から10世紀初頃のものと思われる。

石塔の本来の方角は移動しているため不明であるが、四仏はいずれも二重円頭光を付けて蓮華座上に坐る。そのうちの一面に表される如来坐像は、左手は腹前に置いて第二指を伸ばし他指を軽く曲げ、掌上に円形持物を載せる。この持物は青巖寺東塔の東面像と同様、円形の宝珠形とする。8から9世紀においては、左手に円形持物宝珠を執る如来坐像は薬師如来である可能性が高い。これに右隣する面の如来坐像は、両手を胸前で合掌印を結ぶ。四仏の中に

合掌印如来坐像を表す例は、桐華寺毘盧庵三層石塔出土金銅舍利函（国立大邱博物館蔵、統一新羅・863年銘）に見られる（図13）。最初の面の背面となる面には、触地印を結ぶ如来像が配される。なお、本像のみ、内衣上端の半裁花文をあらわす帯状縁飾が彫出されるなど他面に比べ丁寧な彫りを見せることから、この面を正面（南面）とした可能性がある。残りの三面は、両手ともに胸前に置いて掌を外に向け、ともに第二～四指を曲げ、他指を軽く伸ばす。これは転法輪印に通じる。

本石塔においても青巖寺東塔と同様に、円形持物（宝珠形）を執る如来坐像と、触地印像とが対の関係で配置されている。転法輪印を結ぶ如来坐像が阿弥陀如来であれば、この面が西面となり、触地印像が南面、宝珠を執る面が北面となる。しかし、後述のようにこの宝珠を釈迦の仏鉢と見なせば、釈迦如来ないし弥勒如来となる。

法雄寺石塔塔身部材（江原道原州市、後三国・10世紀初頃）

現在、法雄寺（第一野戦司領部軍法堂）の境内に屋蓋石とともに残されている一基の方形部材である。いずれも二重円頭光と身光を付け、蓮華座上に右足を上にして結跏趺坐する如来坐像が四面に表され、そのうち、東面に鉢と見られる円形の持物を執る薬師如来坐像、対する西面に転法輪印を結ぶ阿弥陀如来坐像、南面に施無畏を結ぶ如来坐像、北面に触地印を結ぶ如来坐像が配置される。これは、先述の陳田寺址三層石塔第一層塔身の四仏のうち、南面（触地印を結ぶ如来坐像）・北面（右手は胸前で施無畏印を結ぶ。ただし、前膊半ばより一部剥落）が入れ替わった形となっており、9世紀後半の慶尚北道慶州東川洞出土石塔塔身部材の四仏の構成に通じる。東川洞石塔は、盆を執る如来坐像（薬師）を東面とし、西面に通肩式に大衣をまとい転法輪印を結ぶと見られる如来坐像（阿弥陀）、南面に左手は腹前に置いて掌を上に向け、右手は胸前に置いて施無畏印を結ぶ如来坐像、北面に触地印を結ぶ如来坐像を配する。

中興寺三層石塔（全羅南道順天市、後百濟・10世紀初、図11-1～5）

中興寺境内に建つ本石塔は、9世紀後半に建立年代を遡らせる見解もあるが、石塔自体の形式および基壇部に浮彫される四天王像（竜を把む広目天など）の図像から見るともう少し下り、後三国時代（10世紀初頃）の建立と考えている。本石塔は、基壇上部に四天王像、二供養菩薩像、仁王像を配し、第一層塔身に四仏を表す。四仏は、いずれも二重円光を付けて蓮華座上に坐る。

東面如来坐像は、左手は腹前に置いて全指を軽く曲げ、掌上に円形持物を載せる。この持物は上三分の一の高さで平らに削られ、その上に何かが込められている表現がなされている。すなわち、鉢形の容器の中に何かが詰まっている表現と見られる。右手は右膝上に置いて触地印を結ぶ。南面如来坐像は、両手ともに胸前に置いて合掌印を結ぶ。西面如来坐像は、左手は腹前に置いて第一・二指を捻じる。右手は胸前に置いて施無畏印を結ぶ。北面如来坐像のみ、蓮華座上に倚坐する。両手ともに腹前に置いて定印を結ぶようである。

南面の合掌印を結ぶ仏坐像は先述のとおり、桐華寺毘盧庵三層石塔出土金銅舍利函に認められる。

左手に円形持物を執る仏坐像が東面に位置している点においては、これまでに確認してきた石塔と同様である。したがって、8世紀後半から10世紀に至る石塔の四仏は、管見の及ぶ限りにおいては、東面に円形持物を執る如来坐像を配することに規則性を見出せる。この円形持物の形状および右手に結ぶ印相には変化が認められるが、本像のように左手に鉢を執り右手を触地印とする如来像と、青巖寺修道庵東塔のように左手に宝珠形の円形持物を執り右手を触地印とする如来像、左手に盒（陳田寺石塔）、盒もしくは鉢（東部洞塔身部材）または宝珠形（清州塔洞石塔）を執り右手を施無畏印とする如来像とが同一の尊格である可能性は十分にうかがえよう。

江陵坊内里三層石塔（江原道江陵市、高麗・10世紀中頃～11世紀初頃）

石造薬師如来坐像（高麗・10世紀中頃～11世紀初頃）を安置する松蘿寺の近郊にあり、現状において本石塔は民家の庭に建つ。方形石塔一基の前に、その石塔の一面に接して別の石塔塔身部材と、石仏断片がまとめて置かれている。石塔は、第一層塔身と屋蓋石、第二層塔身と屋蓋石、第三層塔身と屋蓋石、相輪部材の計七材が残る。このうち、第一層塔身に四仏が彫出されているが、移築されているため、建立当初の配置、各如来坐像の方角は不明である。

本石塔の四仏のうち、尊名が明らかなものとしては、智拳印を結ぶ毘盧遮那仏坐像、その面の背面に弥陀定印を結ぶと見られる阿弥陀如来坐像がある。しかし、この二面は対峙する位置にあることから、阿弥陀如来を西面とすると、毘盧遮那が東面となる。

上述の作例に認められるように、韓国の石塔における四仏の配置については、東面に円形持物（宝珠、盒、鉢）を執る如来坐像が、西面の阿弥陀如来と対に置かれる場合が多い。その点において、本作例は新たな系統に属する四仏の配置といえる。なお、南面となる面に定印を結ぶ仏坐像が配される例は他にあるが、尊名を特定するには至らない。また、北面の如来坐像は円形の持物を執るが、これを仏鉢とし、釈迦如来ないし弥勒如来となる可能性もあろう。

なお、先の清州塔洞石塔においても、円形持物（宝珠）を執る如来坐像の左側に連続する面に、通肩式に大衣をまとひ転法輪印を結ぶ如来坐像が配置されていた。この面の如来坐像を阿弥陀如来とすると、宝珠を執る面は南面となる。このように、南・北面に配置される円形持物（宝珠）を執る如来坐像は、尊名同定に関していくつかの可能性が残される。

槐山三訪里三層石塔（忠清北道槐山市、高麗・10世紀前半頃、図12-1～5）

寺址からは、高麗時代の魚骨文瓦片、朝鮮時代の素文瓦片および、高麗末から朝鮮時代とみられる白磁や粉青青磁の陶器片が出土している。現在、地上遺物としてこの三層石塔が一基あるが、1996年に出土したといわれる相輪部、第三層塔身、基壇面石のうち二材、基壇の台石は後補材となっている。また、

第一層塔身部材の方角も、当初の配置ではない。そのため、現在、正面を向く面を第一面とし、時計回りに第二面、第三面、第四面とする。

第一面の如来坐像は、左手は腹前に置き、右手は胸前で施無畏印を結ぶ。腹前に置いた左手の上の持物の有無は確認できない。第二面の如来坐像も左手は腹前に置き、右手は触地印を結ぶ。第三面の如来坐像は、弥陀定印を結ぶ阿弥陀如来である。第四面の如来坐像は、左拳印を結ぶ毘盧遮那仏とする。

そのため、阿弥陀を表す面を西面とすれば、本石塔においては、毘盧遮那仏が北面ということになる。青巖寺修道庵三層石塔においても北面に毘盧遮那仏が認められた。また、西面に配置される如来像（阿弥陀）の手印として、弥陀定印が定着化したことも着目しておきたい。すなわち、密教系の四仏の定着が予見されることである。しかし、8世紀中頃にはすでに韓国に中期密教は伝播していたが、その受容は極めて部分的なものであり、8世紀後半以降の新羅華嚴宗の本尊像の図像として智拳印を結ぶ毘盧遮那仏が採用されていたことなどから、新羅華嚴宗の中に取り込まれる形での受容に留まっていたという見解がある⁶。

唐津安国寺址石塔および石塔塔身部材（忠清北道唐津郡、高麗・13世紀）

現在、菩薩立像三軀が林立する壇の下に、屋蓋石四材を伴う石塔塔身部材（その1、現状における総高3m）と、その傍らに別の塔身部材（その2）が置かれている。

塔身部材（その1）は、一面に門扉を彫出する。他の三面には、いずれも伸びた蓮茎の先端に開花した蓮華上に坐り、一重の頭光・身光を付ける如来坐像を表す。門扉を表す面を第一面とし、時計回りに第二面、第三面、第四面とする。

第二面如来坐像は、通肩式に大衣をまとう。右足上に結跏趺坐するようである。左手は胸前、右手は右膝に置くが、摩滅のため印相は不明である。第三面如来坐像は、通肩式に大衣をまとう。左足上に結跏趺坐すると見られる。左手は左膝、右手は胸前に

置くが、摩滅のため印相は不明である。第四面如来坐像は、偏袒右肩式に大衣をまとうか。左足上に結跏趺坐すると見られる。左手は左膝、右手は胸前に置くが、摩滅のため印相は不明である。

塔身部材（その2）は、二面は摩滅が著しく像容を確認できない。他の二面には円形頭光を付け、蓮華座上に坐る如来坐像を彫出する。智拳印を結ぶ仏坐像を第一面とし、その左側の面を第四面、他面を第二面、第三面とする。なお、第二・三面は表面が完全に摩滅している。

第一面如来坐像（毘盧遮那）は、下台（反花）・中台（方形）・上台（仰蓮、蓮弁内に花文を表す）からなる蓮華座に右足を上にして結跏趺坐し、通肩式に大衣をまとい、智拳印を結ぶ。第四面如来坐像は、下台（反花）・中台（円筒形）・上台（仰蓮）からなる蓮華座に右足を上にして結跏趺坐し、偏袒右肩式に大衣をまとう。左手は腹前に置き、掌を上にして全指を軽く伸ばす。右手は胸前に置き、掌を下にして数本の指を軽く伸ばすようである。両手の間に持物を執る可能性もあり、すなわち、左手に置いた薬器に右手を添える印相（智吉祥印）を結ぶ薬師如来の可能性もあるが、表面が摩滅しており明確ではない。

10世紀以降の石塔四仏において、南面に毘盧遮那仏を配置する傾向があることから、第一面が南面であった可能性がある。そうであるならば、第四面は東面となる。10世紀の後三国から高麗前期にかけて、全羅北道全州東鶴洞出土石造薬師如来坐像（全州教育大学校博物館蔵、後三国・10世紀前半）など、忠清道・全羅道を中心に智吉祥印を結ぶ薬師如来像の造立が認められることから⁷、本石塔の東面においても、智吉祥印を結ぶ薬師如来である可能性がある。

桐華寺毘盧庵三層石塔出土金銅舍利函（国立大邱博物館蔵、863年銘）

石塔ではないものの、石塔塔身部より出土した舍利函であるため、取り上げたい。第一面の如来坐像は、偏袒右肩式に大衣をまとい、右肩に內衣の袖をあらわす。左手は腹前に置いて全指を伸ばして掌上に円形持物を載せる。この持物は上三分の一の高さ

に線刻が入り、上面が平らに整えられた表現となっており、鉢形の持物とする。右手は胸前において施無畏印を結ぶと見られる。第二面の如来坐像は、通肩式に大衣をまとい、宝冠を戴き、胸前で智拳印を結ぶ宝冠如来形の毘盧遮那仏坐像である。第三面は、如来坐像の台座下に蓮茎の表現が認められ、一本の茎から枝分かれし、本尊および両脇侍菩薩立像の蓮華座を支える。通肩式に大衣をまとい、胸前で合掌印を結ぶ如来坐像（図13）である。第四面は、動物（マカラか？）を左右に伴う八角形中台、蓮華座の上に坐す如来坐像である。偏袒右肩式に大衣をまとい、左手は腹前に置いて掌を上にして全指を伸ばし、右手は下げて触地印を結ぶ。

毘盧庵三層石塔出土の舍利容器外面と比較的制作年代が近い中国陝西省扶風法門寺塔の地宮より出土した銀製鍍金宝函においては、大日如来を表す面の背面には、左手は左膝に置き、右手は施無畏印とする釈迦如来図が配されており、配置からも慎重な判断が必要な作例である。

4. むすびにかえて

以上のように、韓国における石塔の四仏は、東面に持物（宝珠・薬盒・鉢）を執る薬師如来坐像、西面に阿弥陀如来像（転法輪印、触地印、弥陀定印）の他は、南・北面に明確な規則性が見出せない。その中で、南・北面に智拳印毘盧遮那仏が配置されることもあった。

四方のうち東・西については一応の規則性がある。そのため、まったく方角の概念を有しない訳ではないが、東・西の如来像以外、南・北の如来像の選択には別の論理が働いた可能性がある。

慶州南山菩提寺の阿弥陀如来坐像（統一新羅・8世紀中頃）など、東・西軸を重要視する傾向がある。太陽が昇る東方、沈にゆく西方を重視することは、農耕に従事する民族において普遍的な信仰でもあり、そしてそれは人間の生死とも結び付く。

なお、中国東北部に展開した契丹族、女真族には、祖先の祭礼に際し、祠堂を東・西に安置する例が報

告されている⁸。朝鮮半島の人々も、その民族的源流が大陸の北方民族に連なることは指摘されており、このような、中国化（仏教化）される以前の、民族的伝統をうかがい知ることができる一例とも言えよう。

いわゆる遼および金塔と称される仏塔には幾つかの形式がある。すでに別稿において触れたが⁹、遼および金代の仏塔には、仏・菩薩・天部などの仏教尊像、八大霊塔名を表す宝塔、法偈を刻出する碑形装飾、宝塔や経幢などのモチーフ、龍・鳳凰・雲などの天界を象徴するモチーフ、宝珠・天蓋・蓮華などの仏菩薩を供養するモチーフなどを第一層塔身に配置する例も少なくない。また、仏教尊像にはいくつかの構成が認められ、金剛界四仏（朝陽北塔、興城白塔峪塔など）、大日如来を含む如来像八軀（中京大塔など）、八大菩薩（中京大塔、朝陽八棱観塔など）の他、如来像三軀と三目十八臂の七俱胝仏母（准提）と見られる菩薩像との組み合わせ（北京天寧寺塔）などもある。

朝陽北塔（方形十三層密檐式磚塔、遼寧省朝陽市、遼・11世紀中頃）においては、南面に与願印を結び馬座に坐す宝生如来、西面に弥陀定印を結び阿孔雀座に坐す弥陀如来、北面に施無畏印を結び金翅鳥座に坐す不空成就如来、東面に触地印を結び象座に坐す阿閼如来が配され、いわゆる金剛界四仏を構成する。金剛界四仏を表す例としては、興城白塔峪塔、宝塔寺塔（朝陽市鳳凰山）、妙峰寺東塔（遼寧省錦州市綏中県）などがある¹⁰。

また、中京大塔（八角十三層密檐式磚塔、内蒙古自治区赤峰市寧城県、遼・11世紀後半）は、智拳印を結ぶ大日如来（南面）を含む如来像坐像計八軀が仏龕内に配される。遼塔およびそれを継承する金塔の第一層塔身に配される尊像としては、この構成が最も多く、崇興寺東・西塔（遼寧省北鎮県）、遼陽北塔（遼寧省遼陽市）、広齊寺塔（遼寧省錦州市）、鉄嶺白塔（遼寧省鉄嶺市）、崇寿寺塔（遼寧省鉄嶺市開原県）、康平小塔子塔（宝塔寺塔、遼寧省瀋陽市康平県）など、多数を占めている。

保存状態により、智拳印を結ぶ大日如来（南面）

以外で印相が明らかにされるのは、広齊寺塔西面の如来坐像であり、左手は腹前に置いて第一・四指を捻じ、右手は胸前に置く。西北面の如来坐像は、左手は腹前に置き、右手は胸前で掌を伏せる。

以上のように、遼塔および金塔における四仏は、金剛界四仏の手印と尊像構成を呈するものと、南面智拳印大日如来像と七軀の如来坐像であり、この場合、多くは左手を腹前に置いて拳を握り、右手は胸前に置く、遼代によく見られる印相を結ぶ。また、大日如来像を含まない如来像で構成される例もあり、上記の左手を拳印としないしは第一指と他指を捻ずる安慰印を結ぶ、両手で緊縛印を結ぶ等の印像が確認された。方角に関しては、塔湾塔など、六角平面の塔があること、保存状態などから印相が確認できない例が多く、規則性を見出すまでには至らない。

麻谷寺第二層塔身の四仏をまとめると、以下のようになろう。まず、東面と西面では右手・左手の位置は共通するが持物の有・無で区別し、南面と北面とは衣端で両手先を覆う点は共通するが手の位置を胸前・腹前で区別するなど、東・西面、南・北面の如来坐像どおし対の意識が顕著に働く特徴からは、統一新羅時代以来の四仏構成の原理がうかがえる。また、東面に盆を執る如来坐像を配する点、南面・北面は尊名同定が困難な如来像が配されることが多い点なども、これまでの韓国の四仏にまみ見られた点であった。以上の点においては、麻谷寺五層石塔は、統一新羅の伝統の上にあるといえる。そして、その中には、新たに宋・遼・金の仏像に見出せる着衣形式や手印を部分的に取り入れ、造像された如来坐像も認められた。

しかしながら、今一度全体的な印象に眼を向ければ、やはり気になるのが経幢を思わせる細身のプロポーションであること、第一層塔身に四仏が配置されず、舍利が納入されていることを暗示するために門扉を表す第一層塔身を別に設けていることなどである。これらの要素は、門扉の上に如来坐像を配する銀山塔林懿行大師塔（金・12世紀後半頃）、北京天寧寺塔（遼代創建、金・世宗代重修¹¹）などの仏塔・

僧塔などが、まず、想起される。またさらに、第一層幢身に仏頂尊勝陀羅尼を刻出し、第二層幢身以上に如来像などを配する経幢の形式などもあろう。

ちなみに、韓国における仏頂尊勝陀羅尼経幢の例としては、平安北道竜川城東洞陀羅尼石幢（1027年）や、黄海南道海州市陀羅尼石幢（高麗）などが現存する。仏頂尊勝陀羅尼経幢造立の事実、遼・金のみならず高麗においても、中国五台山を中心に展開した新たな仏舎利信仰が流布していたことを示すものである。しかし、上記以外に、朝鮮半島中南部において、あからさまな仏頂尊勝陀羅尼経幢の形式を採る作例はない。そこで想像をたくましくすれば、韓国における石塔においては、陀羅尼経幢と通じる機能を、仏塔が担っていたということである。脇侍像としてではなく合掌印を結ぶ供養の尊像のみを壁面に表す仏塔が、六角多層の平面プランをもつことから遼末～金代の建立とされる点なども鑑みると、麻谷寺五層石塔について、これまで以上に、遼・金代の作例との比較考察が必要ではないであろうか。

なお、遼・金代の仏塔における莊嚴モチーフと高麗仏塔とのより総合的な比較考察は別稿に譲り、今後の課題としたい。

註

- 1 麻谷寺五層石塔を取り上げる図書としては、主に次が上げられる。
 - ・金禧庚『塔』韓國の美術2、悦話堂、1982年
 - ・『石塔』韓國의美⑨、中央日報社、1986年
 - ・張忠植『新羅石塔研究』、一志社、1987年
 - ・尹昌淑『文化財解説－塔婆－』、白山出版社、1991年
 - ・朴慶植『統一新羅石造美術研究』、學研文化社、1994年
 - ・秦弘燮『韓國의石造美術』、文芸出版社、1995年
- 2 これまでの先行研究を網羅し、麻谷寺石塔と敬天寺多層石塔について建築様式および思想的背景からまとめた論考としては、李永澤「高麗後期石塔의研究－麻谷寺5層石塔斗敬天寺多層石塔을中心으로－」（東國大學校碩士學位論文）、2001年がある。また、近年行われた解体修理の報告を踏まえた論考として、洪大韓「麻谷寺五層石塔의様式斗建立時期研究」、『東아시아文化研究』第53集、2013年5月、175～217頁に詳しい。さらに近年の論著として、朴慶植「麻谷寺五層石塔에관한考案」、『百濟文化』第52集、2015年2月、5～27頁がある。

- 3 拙稿「北京市周辺における遼塔の第一層塔身莊嚴モチーフについて－北京天寧寺塔再考の第一段階として－」、『金沢美術工芸大学紀要』第58号、2014年3月、57～82頁。
- 4 姜友邦『法空斗莊嚴－韓國古代彫刻史의原理Ⅱ』、悦和堂、2000年、164～183頁。
- 5 朴亨國「韓国統一新羅時代における石造如来像の流れについて－新羅華嚴宗における本尊の図像変化を中心に－」、『名古屋大学古川総合資料館報告』第11号、1995年および朴亨國「統一新羅時代後期の石造毘盧遮那仏坐像に関する研究」、『美術史』139号、美術史学会、1996年。
- 6 朴亨國「第十一章 韓国の密教美術：善無畏系図像の新羅伝来を中心に」、立川武蔵・頼富本宏編『中国密教』シリーズ密教3、春秋社、1999年、223～238頁など。
- 7 拙稿「韓国における薬師如来像について－いわゆる智吉祥印を結ぶ作例の紹介をかねて－」、真鍋俊照編著『密教美術と歴史文化』、法蔵館、2011年、175～198頁
- 8 主に次の論考による。
 - ・今井秀周「遼祭山儀考」、『東海女子短期大学紀要』25号、2000年
 - ・山根弓果「遼諸皇帝の仏教受容と祭天地」、『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第33集、2011年12月
- 9 拙稿「中国・遼寧省におけるいわゆる遼塔の第一層塔身浮彫尊像に関する調査報告」、『金沢美術工芸大学紀要』第55号、2011年3月、49～92頁。
- 10 拙稿「遼塔・金塔における碑形装飾について」、『金沢美術工芸大学紀要』第59号、2015年3月、61～82頁。
- 11 拙稿「北京天寧寺塔について」、『密教図像』第33号、密教図像学会、2014年、1～16頁。

付記

本稿は、平成26年度科学研究費による学術研究「遼・金・高麗における仏塔の浮彫莊嚴に関する研究」（基盤研究(C)、研究代表者：金沢美術工芸大学・水野さや）および平成27年度金沢美術工芸大学奨励研究の成果の一部である。

（みずの・さや 芸術学専攻／東洋美術史）
（2015年10月30日 受理）



図1-1 麻谷寺五層石塔 南面全景



図1-2 同 相輪部



図1-3 同 基壇部地台石



図1-4 同 第二層塔身 東面 如来坐像（薬師如来）



図1-5 同 第二層塔身 南面 如来坐像



図1-6 同 第二層塔身 西面 如来坐像



図1-7 同 第二層塔身 北面 如来坐像



図2 庇仁五層石塔（忠清南道舒川郡）



図3 銀山塔林僧塔（北京市昌平区）



図4-1 崇興寺東塔（遼寧省北鎮市）



図5-1 懿行大師塔（北京市昌平区銀山塔林）



図4-2 同 基壇部地台石（部分）



図5-2 同 基壇部



図6 西山一塔（大連市普蘭店区）



図7-1 雲居寺広公禪師塔（北京市房山区）



図7-2 同 幢身部 如来坐像



図8-1 塔湾塔（遼寧省遼陽県）



図8-2 同 第一層塔身（弥陀定印如来坐像・持華盤菩薩坐像・合掌菩薩坐像）

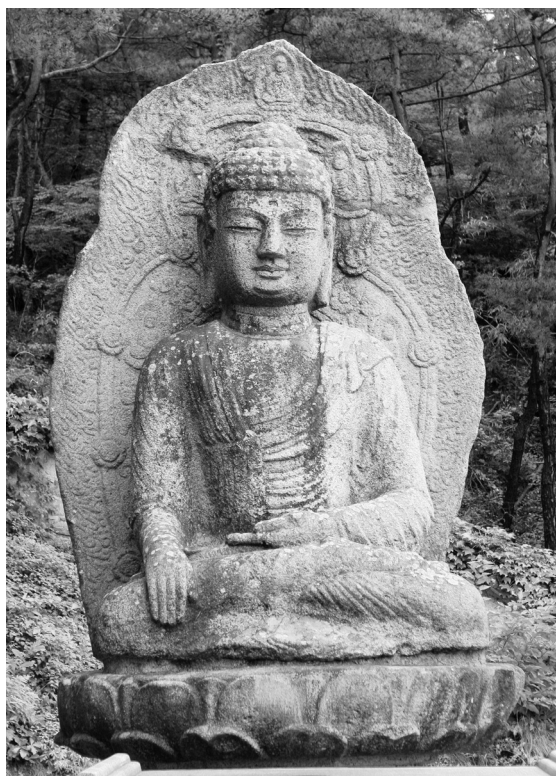


図9-1 菩提寺阿弥陀如来坐像（慶尚北道慶州市）

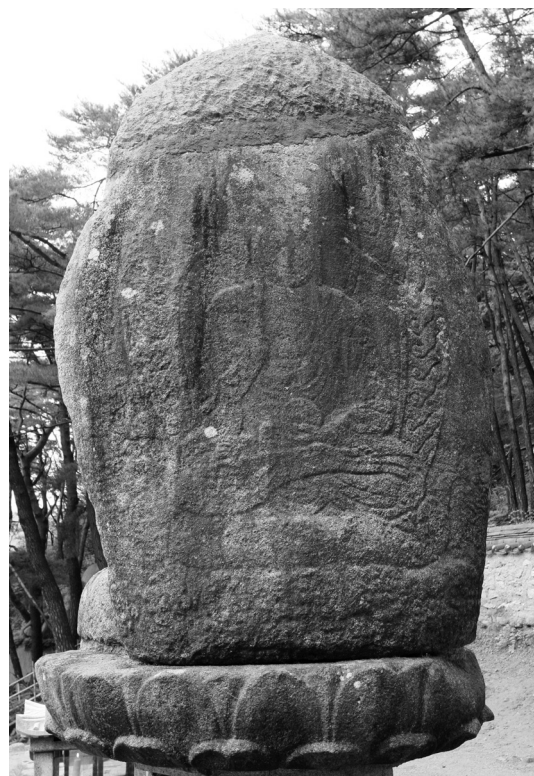


図9-2 同 光背背面 如来坐像



図10-1 陳田寺址三層石塔（江原道襄陽郡）

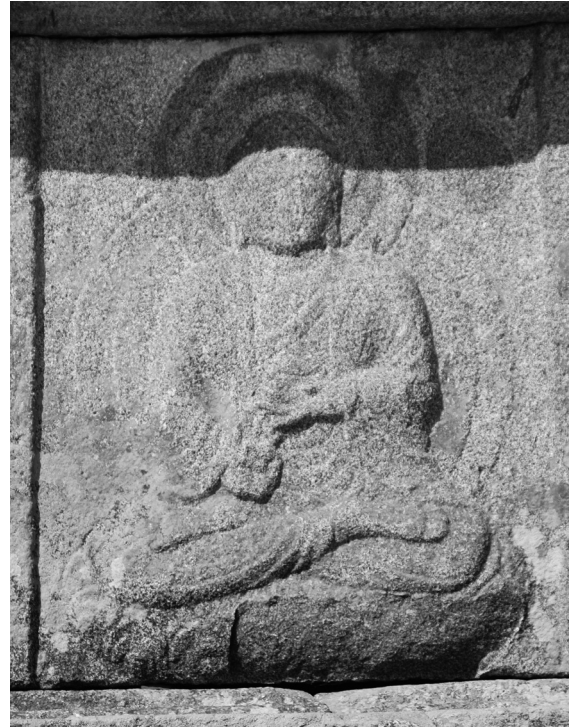


図10-2 同 第一層塔身 東面 如来坐像（薬師如来）



図10-3 同 第一層塔身 南面 如来坐像（触地印）



図10-4 同 第一層塔身 西面
如来坐像（転法輪印・阿弥陀如来）



図10-5 同 第一層塔身 北面
如来坐像（施無畏印）



図11-1 中興寺三層石塔（全羅南道順天市）



図11-2 同 第一層塔身 東面
如来坐像（藥師如来）



図11-3 同 第一層塔身 南面
如来坐像（合掌印）



図11-4 同 第一層塔身 西面
如来坐像（施無畏印）



図11-5 同 第一層塔身 北面
如来坐像（定印）



図12-1 塊山三訪里三層石塔
（忠清北道塊山市）

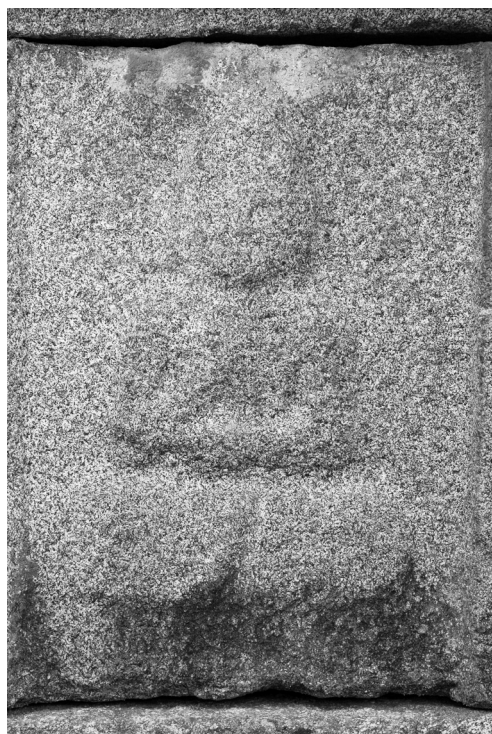


図12-2 同 第一層塔身 第一面
如来坐像（施無畏印）



図12-3 同 第一層塔身 第二面
如来坐像（触地印）



図12-4 同 第一層塔身 第三面
如来坐像（弥陀定印）



図12-5 同 第一層塔身 第四面
如来坐像（左拳印）



図13 桐華寺毘盧庵三層石塔出土
金銅舍利函線刻四仏 統一新羅（863年銘）
（合掌印を結ぶ如来三尊）